

B-100 ズボンの折目線に関する研究 (第6報)
—折目線第二因子があらわす捻れについて (その1)—

高知女大家政 市川 一夫
松浦千代子
○寺内アヤ子

1. 現在公表されている参考書および雑誌等に掲載されているズボンの設計法により作られるズボンのほとんどは、市川の考案した測定器によって、その折目線の水平方向を調べてみると、下肢を入れる部分では“すそ”にいくにしたがいより外向するように捻れていることがわかった。設計図の解析によって、この捻れが折目線第2因子発見の端緒になったのである。折目線第3因子までの性質を解明できたので、これでズボンの折目線の水平方向に関する限り発注者の要求に見合ったものが製作できるはずである。ただこのうち捻れに最も関係のある第2因子の影響は布地の種類によって変わってくるものと想像されるので、二、三の布地につき予備的に検討してみた。

2. 使用布地は綿、ウール、テトロンウールの3種類である。前身に相当するものとして、ここでは方形(長さ24cm, 18cm, 12cm)のものを、後身に相当するものとして、方形の底辺に9.5度の角度をもっている菱形のものを組み合わせ、相対する両辺を縫合、アイロンで折目線をつける。つぎに上部の前後の折目線を支え、また円形および楕円形の筒を入れて捻れの角度を測る。

3. 捻れの角度を測るには楕円筒を用いたのが測りよく、布地は最も大きい形のものが捻れの状態が安定していてよく、布地の種類としては綿、テトロンウール、ウールの順に捻れが大きかった。